

# 序

全画像30分以内の即時読影という環境下でCT、MRI等とともに全単純X線写真の読影を10数年続け、胸部立位、臥位、ポータブル写真を多量に読影し、なれ親しんだ分だけ少し自信が付きました。

CTはその優れた空間分解能のため、多種多様な胸部病変を細密に描出可能です。

それでは両者を観察すれば、かなり正確に診断できるかと言えば、難症例山積みです。

他の領域の画像診断に比較し、胸部領域が難しいというつもりは全くありませんが、とりつきにくく、参考書を読破しても、これは正常、この疾患や状態は何であるとなかなか言い切れず、厄介な領域の一つであることは間違いありません。

順番通りに年を取り、私も良い年齢となってしまいましたが、ここ数年、多くの学生、研修医、臨床の先生方に胸部画像診断にとりつき易く、興味を持って診断していただけるような参考書を書きたいと考えつつ、まとめてみました。「胸部X線の正常・異常画像を見極める」<sup>1)</sup>、「胸部X線写真の読影」<sup>2)</sup>、及び「胸部ポータブル写真の読み方」<sup>3)</sup>がこれらで、最後がこのCT画像主体の『胸部疾患画像アトラス』となりました。特にポイントとした点を列記しますと、

1. 特に胸部X線写真が有用な病変分布（上肺野、下肺野優位、又は肺野末梢や中枢優位分布）を知る。また大変有用な肺容積の変化（減少や増加）を知る。
2. 日常臨床で良く見る疾患を多量な画像を知ることによって充分理解し、やや稀な疾患を区別できるようにする。
3. 代表的な所見のみでなく、一つの疾患が示し得る多種多様な画像所見を、他ではない総数2,000以上の画像を示すことで、参考書とは逆、すなわち所見から疾患にたどりつく日常診断の一助にする。

画像診断学が全て経験学とは思いませんが、多くの画像を知るとは魅力的です。

ここまですべてが本書で目指した点ですが、さらにAFIP等の病理学成書で病態の本質を学べばさらに実力がつき、診断の楽しみも見い出せるでしょう。

研修医や一般臨床医の先生方のお役に立つとともに、経験豊富な先生方のリフレクションにもなれば最高です。

2016年3月

昭和大学横浜市北部病院放射線科 教授  
櫛橋民生

1) 「胸部X線の正常・異常画像を見極める」(櫛橋民生/編) 羊土社, 2010

2) 「胸部X線写真の読影」(櫛橋民生/編著) 中外医学社, 2013

3) 「胸部ポータブル写真の読み方」(櫛橋民生/編著) 中外医学社, 2014